

ダビデ王物語講解説教 サムエル記下2章1-3章1節
『ダビデ、王位に就く』

旧約聖書を読んでいて、とても驚かされることの一つは、例えば創世記でアブラハムに神の言葉が語られる。彼はその言葉を聞いて、実際に、言われた通りに神が言われた約束の地に向かって、家族と共に住んでいた場所出て行く。神の言葉に聞いて、実際に従って行動し、生活をかえていく。

確かに、そのこと自体驚きですが、さらに大きな驚きは、アブラハムはその後の生涯でその最初に語られた神の言葉にずっと聞き続けていくということです。アブラハムの人生の歩みの中で、疑ったり、信じられなくなったり、不安になったりすることはもちろんありました。だが生涯にわたって自分に語られた神の言葉、その最初の言葉にずっと聞き続けていく。従っていく。神からの言葉を確認するために、問い直したり、問いかけたりすることもありました。神から新たな言葉をいただくこともありました。しかしそれは自分に与えられた一つの言葉に聞くためでした。ずっと一つの言葉を、生涯にわたって聞いて歩んでいくのです。

それはモーセも全く同じです。アブラハムとモーセでは、周りの環境も、状況もまったく違うのですが、神から与えられた言葉を生涯かけて聞いていく、という点では全く同じ。驚くというのは、自分に与えられた神の言葉に聞くことが人生になっていく、ということです。生涯かけて聞く、というよりも、聞くことが生涯になっている、ということ、そのことに驚かされるのです。人は愚かで、迷いやすく、信仰といっても、わたしたちの側では全く一定していない、不安定なものです。そういう人の歩みの中で、生涯かけて神の言葉に聞く、聞くことが生涯、という道を旧約聖書の先人たちは歩いていった、神はそのように導かれた、そのことに驚きとともに深い示しを与えられるのです。

サウルとダビデの凄絶な物語を読み進んできました。サウルは神の言葉を聞かず、神の意志を退けて、悪霊に苛まれるものとなり、ダビデへの嫉妬からダビデを殺そうとし、ダビデは逃亡生活を余儀なくされる、というストーリーでした。

ダビデはサウルの追手を振り切るためにイスラエルにとって敵対していたペリシテの国に今で言う亡命をし、ガトの王から小さな町をもらい受け、そこで生活するようになります。一方サウルは女霊媒師のもとを訪ね、死んだサムエ

ルを呼び出して、あらためてサムエルの言葉を聞こうとする。だがサウルは、その差上瑠の言葉にも聞き従わない。迷走していくのです。

しかしやがてサウルはペリシテ軍の攻撃の前に敗退し、息子たちも殺され、サウル自身も死んでしまうのです。

ダビデはサウルの死の知らせを受け、哀悼の詩をうたう。ダビデにとってサウルは自分殺そうとする狂気の者であると同時に、自分が仕えた王であり、義理の父であり、ある大事な、大切な関係を生きた相手でありました。そして深い友情で結ばれたサウルの息子ヨナタンの死も悼み、哀悼の詩をうたうのです。

ダビデはサウル死去の報の中で、神の言葉を求め、その言葉に聞き従ってユダのヘブロンに上り、ペリシテのガドと一緒に住んでいた者たち、皆を引き連れ、ユダヤに戻ってきました。そしてヘブロンで、人々によって油注がれ、ユダの王となりました。

一方、王を失い、ペリシテ軍に大敗したイスラエルは軍の司令官アブネルが実質的に権力を握り、戦死しなかったサウルの息子イシュ・ボシェトを擁立して、イスラエルの王としました。つまりユダヤの国土を二分して、ユダはイスラエルの南の地方、イシュ・ボシェトは北の地方の王となったのです。一時的ではあっても二王国になったのです。

アブネルは生き残ったサウルの息子を王として立て、実際には自分が権力を握りました。彼からすれば、ダビデが南のユダで王となったことは謀反以外の何ものでもない。断じて許せないことです。一方ユダの人々にすれば、ダビデこそ、全イスラエルの王となるべき人。激突は避けられない事態です。

両軍はギブオン池で睨み合いの状態になりました。アブネルはダビデ側の司令官に申し入れ、両軍12人ずつの兵士を立てて戦うことにしますが、結果は相打ちになるのです。その後も両軍の戦いは続き、ダビデ軍が優勢になっていきました。イスラエル軍が後退していくのをダビデの若い兵士が追い、アブネルを追い詰める。だが結果的には、若い兵士はアブネルに槍で突かれ死んでしまう。もともとアブネルはその青年もその父も知っている間柄だった。皆ユダヤの民であるわけですから。アブネルはダビデ軍の司令官ヨアブにこれ以上の殺し合いをもうやめよう、同じ民が悲惨な結末になるのを見ることになる、と停戦を申し入れるのです。

はじめから戦いなどしなければ、一番いい。だが、戦いを避けられず、あるところまで戦い、犠牲者を出す中で、戦いをやめようとする。アブネルの停戦の提案自体は意味あることですが、しかし、停戦は一旦はなされたものの、この後両軍はたびたび戦うことになっていくのです。ダビデは、ユダの王に就い

たものの、戦いは続き、混迷していた。

もうダビデが神によって選ばれ、サムエルに見出され油注がれた、あの時からずいぶん時間が流れました。もともとダビデは自分が王になりたいと思っていたわけではないし、羊飼いとして裕福ではなくとも豊かな生活をしていた。にもかかわらず神によって選ばれ、神によって用いられる器として、思わぬ場所に呼び出されてきたわけです。ダビデのその後の人生はもうすでに波乱万丈と言ってもいい歩みになっていきます。言い方はよくないかもしれませんが、神の言葉によって引きずり回されていく。そして今また、ようやく最初の神の言葉のとおり、王位につくのです。しかし、ユダヤの国は二分され、ユダヤの中で戦いをしなければならない状態でした。ダビデはどんな思いで、この時を過ごしていたのか。

詩編の中にはたくさんのダビデの詩があります。その数は大変多い。ダビデの人生のいろんな場面で歌われた詩です。その詩の一つ一つをサムエル記を読みながら紐解いていくといろいろなことを感じさせられます。

「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず、呻きも言葉も聞いて下さらないのか。」ダビデの詩は率直ストレートに、神に訴え、神に向かって叫び、祈ります。苦しいこと、つらいことに直面して、わたしをなぜお見捨てになるんですか、と叫びます。その時の苦しみを隠したり、抑え込んだりしない。でもそのすぐ後に、「わたしたちの先祖はあなたにより頼み、より頼んで、救われてきた。助けを求めてあなたに叫び、救い出され、あなたにより頼んで、裏切られたことはない。」と神に向かって歌うのです。ダビデの中に、神さまどこにいるんですかという叫びと、神さまは必ず、わたしたちを救い出し、裏切ることはない、より頼んでいけばいいんだ、という安心、それが矛盾ではなく、共存している。しかもそう祈ったまさにそのすぐ後には「わたしは虫けら、とても人とはいえない。人間の屑、民の恥。」そういう言葉が出てくる。自己嫌悪。自分という人間のどうしようもなさ。ダビデはそういうことを痛感していた。それは言ってみればサムエル記の背後にあるものです。サウルとの葛藤の日々の中で、戦争の続く日々の中で、日常の歩みの中で、自分は虫けらだ、とても人とはいえない、人間の屑だ、というのです。自分の罪や愚かさにも苦しむこともあったのでしょう、何かをした後で後悔の念が襲ってくることも多々あったのでしょう。そういう自分を生きてきたのです。そして「主よ、あなただけはわたしを遠く離れないでください。わたしの力の神よ。今すぐにわたしを助けてください。」と祈る。

ダビデは神との関係の中で、苦しんだり、悲しんだり、喜んだりしていた、叫んでいた、そのことが伝わってくるダビデの詩は詩編にたくさんあります。

サウルが死んだという報を受けたダビデは王とその息子のために詩を歌った。そして哀悼の詩をうたうと、ダビデはすぐに、まず神の言葉に聞こうとするのです。サウルという自分を殺そうとしていたもの、しかし自分にとっての王がいなくなった今、自分はどうしたらいいのか、まず神に聞いたのです。必死に聞いたのです。すると神は、ユダの町に上れ、と。それはペリシテを出て、そこでユダヤ全体のため歩みだせ、ということの意味をしています。王として歩みだせ、という意味が込められていたでしょう。ダビデはその神の言葉を聞き、その言葉に従うのです。行動するのです。今日の聖書箇所からわたしたちが受け取るのは、その一つのことです。

ダビデは自分の行く手がわからない日々を送ってきた。王に追われ、敵の国に亡命し、明日もわからぬ日々を送っていた。しかしダビデは神に自分の苦境を率直に訴え、嘆き、呻き、叫び、かつまた神を信頼し、神により頼み、神にすがり、神を求め、何度でも神の言葉に聞き、最初に神が与えた約束の言葉にずっと聞き従い続けた。アブラハムやモーセに通じる道を歩んだ。そのように導かれたのです。生涯かけて聞く、というよりも聞くことが生涯、となるよう導かれてきたのです。そのことをわたしたちもダビデの歩みから受けとめていきたいと願うのです。